

公益財団法人 トヨタ財団 御中

助成番号

D17-N-0815

2018年 11月1日

変化の記録 (Record of Change)

この記録は、プロジェクトを通じて得た個人的な感想や考えをうかがうもので、プロジェクト全体の意見を代表するものではありません。また、この記録は代表者およびプロジェクト対象国・地域より各1名が作成してください。

名前	上杉 孝實
プロジェクトでの役割	代表
所属機関名	基礎教育保障学会
役職	会長

1. プロジェクト開始時の想定と現実の違い、考えられるその理由

プロジェクト開始時点でも、成人の基礎教育に関して、韓国では、生涯学習法に基づいて、小学校や中学校の学歴を取得するための、正規の学校以外の教育機関を認定していることはわかっていたが、プロジェクトの進展により、これに取り組んでいる機関は民間によるものが多く、正規教員は少ない一方、学歴取得に向けての教科書が定められていて、教育形態としては一斉授業も多いことなど、実際に交流や現地訪問で詳細が明らかになった点も多い。この点、日本では夜間中学校など学校教育法に基づいた教育機関で成人が多く学んでいるが、その学校の少ないことや、夜間小学校がないことなどが韓国側にとって、日本の特色としてとらえられている。日本では、正規の夜間中学校以外に自主夜間中学や識字・日本語教室が多く存在し、社会教育の範疇で扱われることや、自主教材が多く用いられていることなどが、韓国側にとって認識されつつある。従来、法や制度面での双方の理解は進んでいても、その実態については、全体的にとらえられていない面があったが、この度のプロジェクトでは、日韓双方の全国組織が関わることによって、詳細な把握がなされるようになっていく。

2. 交流活動によって生まれた、自分およびプロジェクトメンバーの変化とその理由

(相手国・地域の現状や課題の捉え方、状況の改善および課題の解決に向けた発想やアプローチ方法などの変化)

成人基礎教育においては、義務教育段階修了に相当する力の取得を保障することが課題であり、そのために韓国ではかなり体系的に教育内容が考えられていて、学校としてのかたちを整えることが指向されている。成人にとって学びやすい教育機会が用意されなければならない。日本での教育機会確保法の制定に見られるように、正規の学校であっても、成人に適した教育内容・方法を伴ったものである必要がある。とくに成人としての学習者は人生経験も豊富であり、これまでも識字教

室などで展開されてきたように、教育の過程のみならず教育機関の運営にあたってその主体性を重視することや、生活や教育を規定してきた社会の把握に力を注ぐことが重要になる。この点で、単に既成の学校をモデルにするのではなく、新たな教育創造が試みられなければならない、フォーマルな教育のみならずノンフォーマルな教育に注目する必要がある。これらについての研究を深めることが、実践上の課題であることが認識されてきている。

3. 1、2によるプロジェクトの変化および想定される自身や組織への影響

日韓相互の教育の比較から、さらに、より適切な基礎教育保障の仕組みと内容を創り出すための共同作業を進めるようになってきている。その際、学習者の果たす役割には大きいものがあり、その意思を十分に反映した取り組みを心がけている。また、ノンフォーマルな教育に着目するとき、他のアジア諸国での実践が参考になることも多く、それらの国々との交流の機会を多くすることにも努めている。これまでも、社会教育関係団体や夜間中学校などによる日韓交流の積み重ねはあったが、今回のプロジェクトで基礎教育に関わる日韓双方の全国組織が共同で交流・研究を行うことが可能となり、それによって、基礎教育保障の仕組みや教育内容・方法の研究が進み、実践に役立てることができると期待される。

4. その他上記に含まれない点

中等教育修了試験など学力試験などが意味を持つ国と異なって、日本では学校卒業が大きな意味を持ち、それが学力をつけることと必ずしも一致してこなかったことからの形式卒業者の存在とその学びへの思いが、夜間中学校入学の可否などを巡って浮かび上がってきた。今回のプロジェクトでは、大きく学校化社会における学校のあり方に関わっても考察を深め、大きな示唆を得ることができると期待される。

- この「変化の記録 (Record of Change)」はトヨタ財団のプログラムオフィサーが参考とするための資料ですが、事前同意を得た上で公開する可能性があります。
- この記録は個人的な見解を記すものですが、他のメンバーと共有することを推奨します。この記録を通じた振り返りの作業が、プロジェクトやその他の活動に活かされることを期待します。

変化の記録 (Record of Change)

この記録は、プロジェクトを通じて得た個人的な感想や考えをうかがうもので、プロジェクト全体の意見を代表するものではありません。また、この記録は代表者およびプロジェクト対象国・地域より各1名が作成してください。

名前	チェ・ゾンボク
プロジェクトでの役割	韓国基礎教育の現況研究、ブックレット執筆
所属機関名	古康総合社会福祉館
役職	館長

1. プロジェクト開始時の想定と現実の違い、考えられるその理由

私は、1997年から識字教育に接し実務者として働いてきており、いまは全国識字基礎教育協議会の理事で運営委員として参加しています。地域では以前春衣社会福祉館に春衣成人学校をつくり、現在は古康総合社会福祉館でも識字教育を続け、学習者の権利と認識、社会参加に対する自信の高揚、社会構成員として堂々と自己主張が拡大できるように努力しています。

日本との識字交流は、2006年に大阪を訪問して深く感銘を受けました。学習者の参加は韓国と日本との間に違いは感じませんでした。それぐらい学習者の学習に対する熱意はどこでも高いということだと思います。つまり、それを反映してかれらの学習権を権利として認め自律的な学習参加と学習向上の機会が円滑に保障されているかどうか、違いがあると思います。

以前初めて訪問していた2006年には、日本の公教育システム、夜間中学に教師が配置されていることだけでも、私は韓国より肯定的に思いました。韓国は、民間でボランティア教師で始まり、2006年から活動費を一部もらっていますが、正規の教員ではありません。学校の教室を一緒に使っている点においても驚きました。現在、韓国は学校開放が行われていない状況であるからです。そして、トヨタ財団プロジェクトの支援で2017年12月に、日本に2回目で訪問し感じたのは、夜間中学の数が少ないということでした。全国に31箇所しかないことには驚きました。すべての地域に夜間中学が設置運営されていると思いました。こういった問題を日本では、長い時間全国夜間中学校研究大会を開いて認識を高め、夜間中学の拡大を持続的に求めていることを知りました。

本プロジェクトを通じて、少しずつ今まで気付かなかったところを正確に知るようになったのは、非常に評価すべきことだと思います。2006年が学習者中心の交流であるとするれば、2017年の交流は実務者及び専門家の交流に近く、日本の研究者たちの考えや悩みをもっと知るようになり、現実の問題が理解できるようになりました。この点が、プロジェクト開始前と今の違いであるといえます。こういうところから、本交流は私により深く知るようになる有益なプロセスであります。もっと多くのことが交流できる時間が続くことを望んでおり、考えの違いを狭め、新しく知った韓国と日本の識字教育の発展的課題をともに悩み考えたいです。

2. 交流活動によって生まれた、自分およびプロジェクトメンバーの変化とその理由

(相手国・地域の現状や課題の捉え方、状況の改善および課題の解決に向けた発想やアプローチ方法などの変化)

まず、日本の夜間中学の現実をよく知るようになったことです。日本の識字教育が夜間中学に対する責任を国に放任せず、積極的に設立する義務をもつようにさせた運動であるということです。63回となる教員、実務者、研究者などの多様な関係者の連携、持続的で中断することのない研究大会の運営などをみて驚き、組織的に識字教育のために努力する様子は私たちが学ぶべきところです。

韓国は韓国識字教育協会、全国識字基礎教育協議会、全国夜学協議会などが識字教育と関連して三つの機構が存在し、相互協議して議論するプロセスを経っていますが、全国的な実践の統一された 이슈がない状況です（日本の夜間中学研究大会のように）。今後韓国の三つの機構が連合して同じテーマで識字教育の拡散を目指したイニシアティブをとる実践を繰り返していく必要があると思われます。韓国は、最近中央政府の補助・支援の中で自律性と主体性がやや喪失した様子を見せており、公共機関に役割の主導権を渡した様相です。主導権を互いに持ちたいという単純な葛藤の問題ではなく、民間自らがアイデンティティを失ってしまう姿に対する憂いであり、公共と民間のガバナンスが必要な状況です。

また、韓国の識字教育は夜間中学と同じく公教育に対する問題提起というよりは、民間活動家の民間領域における主体的な活動であり、公教育とは違う別の運動でした。公教育システムに成人識字教育の学習者たちが含まれることに対して賛否両論がありました。国の役割を明確にし、学習者の基本権である教育権を実現するレベルにおいては、公教育の支援システムに識字教育が含まれなければなりません。日本が夜間中学を増やしていくのと同じく、韓国は識字教育が基本義務教育の課程にあり、学習空間は学校の教室が使用できるように、学習者が教育対象として登録され管理できるようにしなければなりません。これは、日本と同じような要求を、韓国側も韓国政府にしないといけない課題です。

三つ目は、社会的認識を広め理解を高めることには、両国がともに努力すべき課題があるように思われます。互いにがんばってきた歴史はあるが、それがただ関係者だけの課題にならないように、政府の役割として、国民の協力で、学習者の権利として、だれもが差別されないように取り組むべき課題として認識していくプロセスが必要です。識字教育に対する参加を高めるための方案を共同で研究し実践していく課題があります。交流の次の課題にしてほしいと思います。

最後に、韓国は民間の役割、教師人材に対する専門性の確保、プログラム研究などの課題を抱えており、日本は夜間中学の拡大設立とともに民間資源の連携と協力を模索していく悩みが必要であるようにみえます。韓国はそれまでのノウハウが民間領域において長い時間蓄積されてきたが、それを対外的に成果を分析、その効果を検証できる作業はできていません。それを検証し提示していく課題を抱えていますが、今回のプロジェクトにおけるブックレットの作成はそういう意味からして重要な課題であると思います。日本の場合は、夜間中学の設立を大々的に拡大していくことに対する努力とともに、韓国のように民間単位の自主的な識字教育機関が増えてほしいです。民間単位

の自主的な教育方法と訓練、学習者の拡大、教材開発などを通じた全国的な運動が並行していけば、長期的に夜間中学の設立により肯定的な広報と認識強化の効果があるのではないかと思います。

3. 1、2によるプロジェクトの変化および想定される自身や組織への影響

課題と課業があるというのは、未来に対する計画を樹立すべき必要があり、それを具体化していかなければならないことを意味します。本交流を通して両国が取り組むべき課題を正確に認識し、道筋を作っていくこと、ビジョンと実践戦略、実践段階を具体化させ、持続的に実践していける基準をつくっていくことが必要であると思われます。この点において、私をはじめ、韓国、日本両国に前向きな影響を及ぼしたと思います。私においても、識字教育の方式と運営に対する悩みを持っています。先述したように、政府主導のトップダウン構造は止揚し、学習者が主体的に学習の内容を選択して決まった学習課題を探し求めるやり方として参加的な学習方法を取り入れようとしています。提供者の立場からしてサービスを与えるような学習ではなく、学習者が学びたい内容を探してそれを選択し学習できるようにする方法を模索しています。

本プロジェクトに期待していることと影響をうけることは、互いに悩みを分かち合い共有できる場ができたということです。だれか個人の考えではなく共同の考えで、地に足のついた代案を作っていく時間であったことから、前向きな影響を受けました。今回のプロジェクトは決まった事業期間で終わるのではなく、両国でブックレットの発行、事業に対する成果の共有、研究発表会、学習の多様化の研究などを、共同の課題と位置づけ、自主的に続いていってほしいと思います。

4. その他上記に含まれない点

随時互いが常時連絡をとりあえる方式、ツールの開発について考えてほしいです。いまは個別に行われるよりは、グループで動いているために、交流会の場だけ会えるし、通訳を通じて話し合いをすることができます。しかし、学びあい交流会でも話があったように、学校の外の青少年に関する話、図書館に関する話など、多様なテーマで識字教育の領域を拡大していくことができ、教育の方法、教育から排除されてしまう対象に対する悩みなど、テーマは多いです。世代交流の方法で識字教育を実践していくことも、そういった意味では新しい方法になれると思います。

このような多様な議論が必要に応じて随時、個別に行うことのできる方法に何があるのか、どのように可能としていけるのか、一緒に悩み、方法を探していくことができればと思います。